

北宋初期における古文家と行巻：科擧の事前運動より見た古文復興の展開について

東, 英壽
九州大学

<https://hdl.handle.net/2324/1546532>

出版情報：日本中國學會報. 51, pp.47-61, 1999-10-02. 日本中國學會
バージョン：
権利関係：

北宋初期における古文家と行卷

——科擧の事前運動より見た古文復興の展開について——

東 英 壽

一 はじめに

唐宋の所謂「古文運動」は、一般には唐の韓愈や柳宗元、宋の歐陽脩らが推進した文學運動として認識されている。しかし、古文運動の實態とはどういふものか、古文運動とは如何なる形態を持った運動體で、どのように社會に働きかけたのか、という視點から考えてみると曖昧で、これまで十分に明らかにされてきたとは言ひ難い。たとえ、従来の宋代の古文運動の研究は、古文家の理念の探求や古文家が如何なる見識・見解を持っていたかの分析、また古文の復興を主張した文人達を時代順に並べ、古文運動史の構築を試みる事が中心であつた。それらは、あくまでも古文の主張の分析や古文を主張した文人達の流れの指摘であり、それをもつて當時の社會にどのように影響を與えたのかという運動體としての考察、分析とは見做すことはできない。

そこで先ず、古文復興の過程を分析するに當つて、今一度「古文運動」という語句自體について確認しておく必要が生じるであらう。「古文運動」という語句は、實は一九二八年に胡適の『白話文學史』の中で始めて用いられたものである。¹⁾その後、胡雲翼や鄭振鐸の著書

北宋初期における古文家と行卷

に使用されるに及び、中國文學史の中で定着した言葉となつた。²⁾當時胡適は『新青年』創刊に始まる「白話運動」を推進し實踐していた。それによつて、胡適が中國文學史を振り返り、所謂「古文運動」という語句、概念を始めて提出したことになる。つまり、我々が中國文學史を把握する際に、しばしば躊躇なく用いる文學史上のタームである「古文運動」という語句は、胡適が提出した現代語なのである。それを無批判に用いて千年以上前の文學情勢に當てはめたが故に、その實態の解明が曖昧のまま、言葉だけが獨り歩きしている感があつた。形式に墮した駢文を排斥し、宋代において古文の復興を完成させたとされる歐陽脩や蘇軾の文集に、夥しい駢文作品が残っている事實は、古文が復興した後も決して駢文は消滅しなかつたことを意味し、それは單純な古文對駢文の對立の圖式だけでは當時の古文復興の實態を把握できないことを明瞭に物語っている。

ところで、北宋の古文復興は、官吏登用試験である科擧と密接な關係がある。たとえば嘉祐二年（一〇五七）の科擧試験は、宋代の古文復興史の大きな事件だと言われる。『宋史』卷三百十九歐陽脩傳に言う。³⁾嘉祐二年の貢擧を知す。時に士子、險怪奇澁の文を爲るを尙び、太學體と號す。脩痛く之れを排抑し、凡そ是の如き者は輒ち黜く。

この科擧で、權知貢擧歐陽脩は當時流行の險怪奇澁の特色を持つた學體を排斥し、明快達意の古文で書かれた答案を採用した。³ その結果、當時科擧の豫備校と化していた太學の出身者がことごとく不合格となり、世間では無名の存在であった蘇軾・蘇轍兄弟や曾鞏ら、後の古文の大家となる士人達が及第した。確かにこれを契機として、受験生達の志向する文體が以後大きく變わるという、社會への影響を與えた。科擧を介することによつて、結果として古文が復興したのであり、科擧というシステムを無視することのできない一例である。他にも科擧と文體の關係について無視できない例として、たとえば前述した歐陽脩は科擧及第を目指して、韓愈の古文をひとまず措いて西昆派の美文を學んでいた、ということが擧げられる。歐陽脩の「記舊本韓文後」に言う。

是の時、天下の學ぶ者、楊劉の作、號して時文と爲す。能くする者は科第を取り、名聲を擅にして以て榮を當世に誇る。未だ嘗て韓文を道ふ者有らず。予も亦た方に進士に擧げられ、禮部の詩賦を以て事と爲す。

このように當時は、科擧に採用された文體の傾向が受験生達の習得しようとする文體に大きく影響を與えていた。そして、古文が廣まるに當たつては他にも様々な要因が考えられるであろうが、その一つに嘉祐二年の科擧を含めて明らかに科擧を介した働きが存在していたことは先ず間違いない。従つて、古文の復興過程を考察する際に科擧に着目することは十分に意義があると言えよう。特に駢文重視であった當時の科擧を古文家が如何にして突破し、官僚となつたのかという問題は、從來全く考慮されることはなかつたが、誠に興味深い事柄である。そして、實はここに當時行われていた「行卷」という風習が大きい

く関わってくるのである。本稿では、北宋の古文復興の展開を科擧、就中この行卷との關連を通して、從來とは異なつた角度から考察し、あわせて北宋時代における古文復興の實踐形態の一端を能う限り明らかにしたい。

二 行卷とは

宋代は科擧制度が整備され完成された時代であると言われ、後代に受け繼がれた制度も多い。こうした宋代の科擧制度は、決して一氣に完成したのではなく、試行錯誤を繰り返しながら、おおよそ神宗朝（一〇六七〜一〇八五）の頃までに確立したと言われる。⁶ 従つて、宋建國から神宗朝に至る百有餘年は、科擧制度の不備な點に様々な改革・改善が加えられていた時期であつた。科擧と古文家の關連を考察する際に注目したいのは、科擧制度が未だ完全には整備されていなかった段階で行われていた行卷という風習である。程千帆氏は行卷について『唐代進士行卷與文學』の中で次のように述べる。⁷

所謂行卷とは、科擧の受験者が自分の文學作品を編集して、卷軸に仕立てて、試験に先立つてそれをその時の社會的、政治的また文壇上の有力者に贈呈し、試験官すなわち試験を主宰する禮部侍郎に推薦してもらうことを求め、それによつて自らの合格の可能性を高める一つの手段であつた。

行卷とは、科擧の受験者が試験前に科擧の合格を左右できるような有力者に對し、私的に自分の作品を獻呈し、自己を賣り込むという事前運動である。⁸ このような事前運動は、試験の公平さを阻害するとして、後に完成した宋代の科擧制度からは排除された。しかしながら、後述するように少なくとも宋建國後約五十年間は、かかる事前運動が

存在し、實力本位であるべき科擧本來の姿とはかなり隔たったものとなっていた。すなわち、行卷は様々な制約を持つ正式な制度とは異なり、事前の運動という、いわば裏舞臺、裏事情的側面を持つものであり、當時の科擧受験生の實態を表とは異なつた角度から窺い知ることができる恰好の材料なのである。のみならず、行卷として獻呈した作品やそれに對する返書中にしばしば古文家達が自己の古文の代表的見解を披瀝している點からも、古文復興と科擧の關係を把握する上で、行卷は決して等閑視されるべきものではない。もちろん、有力者に作品を獻呈する行爲は、當然ながら古くから存在していた。ただ、一般的な作品獻呈行爲と行卷との違いは、その獻呈した作品が科擧の進士科の試験に直接的に役立つかどうかという點にある。前掲の程千帆氏によれば、行卷は密接に進士科試験と關連しているので、通常送られる作品と區別するために「行卷」という固有の名稱が生まれたと言う。行卷は進士科受験生にとつて試験前の事前運動として大いに役立つていたので、その意味において、昔から行われてきた有力者への一般の作品獻呈とは截然と區別できるのである。

ところで、この行卷に着目して唐代における韓愈や柳宗元の古文復興を分析したものに、前掲の程千帆氏『唐代進士行卷與文學』がある。ただ、程千帆氏の著書はそのタイトルから分명한如くあくまで唐代に限つての考察であり、宋代についてはその初期に行卷の風習が消滅したことを指摘し、詳しくは論及していない。更に、北宋の古文復興過程を行卷との關連から分析した他の研究者は管見の及ぶ限り未だ見當らない。しかし、宋代においても建國後約五十年間程は、次章で確認するように、行卷が行われていたことは確實なので、行卷を軸にして古文復興の過程を考察することは可能ではないかと考える。

三 宋代の行卷

事前運動としての行卷が有効に働くためには、試験官が受験生を特定できなければならない。従つて、受験生の匿名性を確保するために科擧の試験に導入された糊名法（封彌法とも言う）・謄録法が、行卷の存廢と大いに關連することになる。そこで、宋代における糊名法・謄録法の創設について確認しておきたい。答案のはじめに書く姓名、貫籍、三代の名諱等を糊づけする糊名法が宋代で最初に採用されたのは、淳化三年（九九三）の殿試で、景德四年（一〇〇七）には省試に導入され、それにもなつて糊名の專官を置き、諸州解試では明道二年（一〇三三）に導入された。一方、答案を全て寫し取る謄録法は、大中祥符八年（一〇一五）に省試で創始され、景祐四年（一〇三七）に諸州解試で採用されている。行卷という事前運動にとりわけ大きく影響を與えるのは答案の始めを糊づけする糊名法であろう。試験官は糊名法によつて答案が誰のものか判断できなくなり、その結果事前の運動や評判が採點には全く反映されず、効力を失うに至つたからである。一方、行卷を効果的に行い、事前に有力者間での評判を高め、それを廣く浸透させるには、有力者の集中している都・開封が最も適していた。従つて、事前運動である行卷の衰退は、景德四年（一〇〇七）に都における省試で糊名法が導入されたことが大きな契機となつたと考えられる。その翌年の受験生の反響について、『續資治通鑑長編』卷六十八では次のように言う。

上の王旦等に謂ひて曰く、今茲の擧人、頗る糊名の考較を以て懼れと爲す。然れども材藝有る者は、皆盡く公なるを喜ぶ。

糊名法の採用により事前の評判が影響を與えなくなつたので、凡庸

な受験生は恐れをなしたのであった。逆に言えば、北宋建國後景德四年頃までの約五十年間は、行卷という事前運動が科擧の及第に影響していたことを如實に物語っている。更に、宋代に確實に行卷が行われていたことは、南宋の王闢之の『滄水燕談錄』卷九の次の記述からも窺える。

國初、唐末の士風を襲ふ。擧子の先達に見ゆるに、先づ牋刺を通ず。之れを請見と謂ふ。既に之れと見え、他日再び啓事を投ず。

之れを謝見と謂ふ。又た數日にして、再び啓事を投ず。之れを溫卷と謂ふ。或いは先達書を以て謝し、或いは稱譽有れば、即ち別に啓事を裁し、委曲敍謝し、更に一見を求む。當時擧子の先達に於けるは、其の禮此の如く之れ恭なり。近歲、擧子復た此の禮を行はず。而して亦た上官の後進を延譽する者有ること鮮し。

この記述は、擧子、すなわち省試受験者が時の有力者である先達に面會する作法を詳しく述べたものである。王闢之によれば、擧子が有力者に初めに名刺を送り、そして書簡を送ることを「請見」と言い、その後面會し再び書簡を送ることを「謝見」と言い、そしてその數日後に書簡を送ることを「溫卷」と言う。溫卷とは、行卷を受け取った有力者に對して自分の作品を讀み過ごさないようにと注意を促す手紙である。従つて、溫卷を送る前の謝見の際に行卷として自己の作品を獻呈するのである。一方、行卷を受け取った有力者は、擧子に返書を送つたり、再度面會したりして、見込みのある受験生を「延譽」する。「延譽」とは、行卷を受け取つた有力者が、他の有力者に擧子を宣傳し、アピールする行爲で、これによつて有力者間での評判が高まり、科擧受験の際に有利になる。擧子は延譽してもらうために行卷を獻呈するのである。

ところで、北宋初期の科擧の競争率を見てみると、咸平五年（一〇〇二）の六十六倍をはじめとして、ほとんどが十倍以上になつていく。かくの如く競争率の激しい試験に合格し、官僚となることを目指していた當時の受験生達にとつて、そこに事前運動の道があるならば、それをうまく利用して何とか合格を果たしたいと考えるのは當然であろう。當時行卷が頻繁に行われていた所以である。

四 行卷を利用した王禹偁の

古文復興の實踐

さて、本章では科擧の事前運動である行卷が確實に行われていた景祐四年（一〇〇七）頃までの中で、王禹偁を手がかりとして行卷と古文復興との繋がりを考えたい。ここで王禹偁を取り上げる理由は、一つには當時の他の古文家達と違い、彼は知制誥を経て翰林學士に任命されるなど政治的に高い地位についており、社會に與える影響が大きいのと思われるからである。今一つには、王禹偁は積極的に後進を誘掖しており、従つて彼を手がかりとして當時の古文家の人脈・繋がりが明らかにになると考えたからである。

王禹偁、字は元之（九五四〜一〇〇二）は、「又た句の道ひ難きを欲するや。又た義の曉り難きを欲するや。必ず然らず。」（答張扶書）として、當時の難解な文章に反對し、文章は平易でわかりやすくなければならないとして、わかりやすい古文を主張した北宋初期の古文家の一人である。

さて、王禹偁のもとには、彼に文章を獻呈して見てもらおうという古文家達が數多く集まつたようである。その中で傑出した存在と言えるのが、孫何（九六一〜一〇〇四）及び丁謂（九六六〜一〇三七）の二

人である。

『宋史』卷二百八十三、丁謂傳は、王禹偁と孫何・丁謂の關係を次のように述べる。¹⁴

少くして孫何と友善にして、同に文を袖し王禹偁に謁す。禹偁大いに驚き之れを重んじ、以爲らく、唐の韓愈・柳宗元より後、二百年始めて此の作有りと。世に之れを孫・丁と謂ふ。

王禹偁は、孫何・丁謂の二人を韓愈・柳宗元に匹敵するとして高く評價した。残念ながら、孫何・丁謂の作品は今日まで僅かにしか傳わつておらず、彼らの作品からその特色や見解を直接窺い知ることはできないので、以下王禹偁側の資料によつて王禹偁と孫何・丁謂の關連を跡づけたい。まず丁謂について言えば、淳化二年（九九一）に作られた王禹偁の「送丁謂序」の中で次のように言う。¹⁵

今春、生果たして來たり。益ずに新文二編を以てし、書を爲り以て我に投ず。其の間に律詩、今體の賦文有り。向の進士と號する所の者の能く及ぶに非ざるなり。其の詩は杜子美に倣ひ、深く其の間に入る。其の文數章は、皆意常ならずして語俗ならず、若し韓柳の集中に雜ふれば、能文の士をして之れを讀ましむるも、之れを辨ぜざらん。

丁謂は、淳化元年（九九〇）冬に、まず王禹偁に自己の作品を獻呈し、更にここで言うように翌淳化二年春に新しい作品を加えて書簡とともに王禹偁に獻呈した。この時丁謂はまだ進士科に及第しておらず、科擧受験生の一人であつた。一方、作品を受け取つた王禹偁は、丁謂の作品の水準が進士合格者も及ばない程だと見做し、明らかに進士科の試験を意識して作品を取り扱つてゐる。従つて、丁謂がこの時王禹偁に送つた作品は、進士科及第を目的とするもので、行卷と考え

て先ず間違いない。行卷を受け取つた王禹偁は、特に韓愈・柳宗元にも匹敵する古文の力量に注目し、その文章は韓愈や柳宗元の文集に混入させても區別がつかない程の水準を持つ古文だとして高く評價した。一方、丁謂とともに韓愈・柳宗元に匹敵すると見做された孫何も王禹偁に自己の作品を行卷として獻呈している。王禹偁の「送孫何序」に言う。¹⁶

今年の冬、生再び闕下に到り、始めて吾が門を過る。我を博むるに文を新たにし、且つ先づ將に書を以てせんとす。猶ほ尋常の貢擧人の若く、恟恟然として先後の禮を執る。何ぞ其の我を待することの薄からんや。

今年の冬とは淳化元年（九九〇）の冬で、孫何が科擧に合格する二年前のことである。孫何が作品の獻呈に先んじて書簡を王禹偁に送つてゐること、また王禹偁も孫何が通常の科擧受験生の如く決められた禮を盡くしてゐると指摘していることから、孫何が王禹偁に獻呈した作品は行卷の風習に則つていたことは間違いない。そして、王禹偁は孫何の文章について「送孫何序」の中で以下のように述べる。¹⁷

凡そ數十篇、皆六經を師載し、百氏を排斥す。落落然として眞に韓・柳の徒なり。

王禹偁は、孫何の古文は六經に基づき、その文章の風格は、韓愈・柳宗元に匹敵すると見做した。このように、孫何は淳化元年冬に、丁謂は淳化二年春にそれぞれ王禹偁に自己の作品を行卷として獻呈した。

では、行卷を受け取つた王禹偁は具體的に如何なる態度をとつたのか。王禹偁の「答鄭褒書」の中で次のように言う。¹⁸

天下の擧人、日々文を以て吾が門に湊る。其の中、群萃に傑出す

る者は、富春の孫何、濟陽の丁謂を得るのみ。吾嘗て其の文を以て宰執公卿の間に誇大す。

省試及第を目指す舉人達の行卷の中から、韓愈・柳宗元に匹敵する古文家として孫何・丁謂を見出した王禹偁は、彼らの文章の素晴らしさを宰相をはじめとする高位高官の有力者達に積極的に推挙し、アピールしていたのがわかる。行卷を受け取った側が有力者に推挙する行動は、前述した如く「延譽」と言われていた。王禹偁が孫何・丁謂の二人を推挙した行動を『石林燕語』卷十では、

王元之、素より釋氏を喜ばず。始め知制誥爲りしとき、名、一時に振るふ。丁晉公・孫何、皆門下に遊ぶ。元之も亦た力を極めて延譽す。是に由りて衆多側目す。

と、行卷に對して行「延譽」という語句を使つてはつきりと説明する。王禹偁の力を極めた延譽行動は、多くの人の妬みを買うほどであったが、孫何・丁謂の二人は、王禹偁の延譽を受けた後にはじめて行われた淳化三年の省試でまさしく及第を果たしている。してみれば、政治的社會的に影響力のあつた王禹偁の延譽は、孫何・丁謂の二人の進士科及第に有効に働いたと言えよう。

孫何や丁謂と同じように、當時王禹偁を頼り、彼のもとへ作品を獻呈した古文家達は多かつた。たとえば、『宋史』卷四百三十二、高辯傳には次の如く述べる。

又た古文を柳開に學び、張景と名を齊しうす。至道中、文を以て王禹偁に謁し、禹偁之れを奇とす。進士に擧げられ、侍御史を累官す。

高辯は、宋初の古文家として名高い柳開につき古文を學んだ。王禹偁が孫何や丁謂に對して強力な延譽を行ない、實際に孫何や丁謂が進

士科に及第したのは淳化年間（九九〇～九九四）で、これはそうした噂を聞いた多くの古文家達を奮い立たせ、彼らに古文家で政治的に力のある王禹偁と何とか繋がりをもちたいと考えさせたであろう。高辯が自己の文章を王禹偁に獻呈して知遇を求めたのは至道年間（九五～九九七）で、それは孫何や丁謂の及第が知れ渡つた後のことであつた。従つて、行卷として獻呈した作品は、高辯の得意の作であり、孫何や丁謂に倣つて古文の文體を用いていたと考えて間違ひなからう。この『宋史』の文脈から考えると、王禹偁が高辯の才能を見出し評價したことを契機として、見事に科擧及第を果たすことができたのがわかる。

他にも、たとえば咸平元年（九九八）の進士である鄭褒は、それ以前に王禹偁に行卷を獻呈していた。その返書（「答鄭褒書」）の中で王禹偁は次の如く述べる。

下車以來、進士皆接する有り。……退きて其の文句を閱するに、辭甚だ簡にして、理甚だ正し。數千百言と雖も、一字の冗長無く、眞に古人の述作の旨を得るのみ。……是れ生の道、孫・丁と同じ。而れども命未だ遇せず。……生の書は首めに孫・丁の事を引く。故に吾其の始末を述べて、文の繁なるを覺えず。

鄭褒も孫何・丁謂の及第を踏まえ、王禹偁に作品を獻呈し知遇を求めた。彼の作品を貫く道は孫何・丁謂と同じであり、作品に見られる表現の簡潔さ、古人の述作に倣つた態度を王禹偁は高く評價していることから、鄭褒の行卷には古文が用いられていたことがわかる。

更に王禹偁の「答張扶書」では、張扶が王禹偁に古文の作品を送り、教示を乞うていたことが明確に窺える。

子又た文を携へ書を致し、道を我に問ふ。……夫れ文は道を傳へ

て心を明らかにするなり。古の聖人已むを得ずして之れを爲るなり。且つ人能く心を一にし、道に至り、身を修むれば則ち咎無く、君に事ふれば則ち立つ有り。其の位無きに及んでや、心の有する所を外に明らかにするを得ず、道の蓄する所を後に傳ふるを得ざるを懼れ、是に于てか言有り。又た言の汎び易きを懼れてや、是に于てか文有り。信なるかな、已むを得ずして之れを爲るなり。既に已むを得ずして之れを爲れば、又た句の道ひ難きを欲するや。又た義の曉り難きを欲するや。必ず然らず。……姑く能く遠くは六經を師とし、近くは吏部を師とし、句の道ひ易く、義の曉り易からしむ。

ここから、張扶が書簡とともに自己の作品を王禹偁に獻呈していたことがわかる。それに對するこの返書の中で、王禹偁は遠くは六經、近くは韓愈を師とすべきであるという自己の古文に對する基本的な見解を披瀝した。「答張扶書」は、これまで王禹偁の古文に對する代表的主張が表出したものとしてしばしば取り上げられてきた。その際、從來は全く指摘されることがなかったが、この「答張扶書」は、實は張扶の行卷に對する王禹偁の返書なのである。張扶の王禹偁への作品獻呈が行卷であつたことは、王禹偁が張扶へ續けて送つた返書（「再答張扶書」）の中で、「今、子進士に擧げられんと欲するも……と進士及第を念頭に置いて論述していることから確認できる。このように行卷への返書で、古文家の見解が表れるということは、當時の古文復興の實態を考える上で、行卷が無視できない存在であつたことを容易に推察させる。これはまた、唐代の韓愈や柳宗元の古文に對する代表的見解がしばしば行卷を送つた受験生への返書に表れていたことと全く同様の狀況を呈している。なぜ、科擧受験生の行卷への返書の中で

その古文家の代表的見解が表れるのかというと、先ず受験生が古文による行卷を行つていたからであり、更にその受験生の將來性があつたので、返書の中で自己の基本的見解をはつきりと打ち出し指導しようとしたからに他ならない。王禹偁の文と道についての基本的な考え方は、道を修めればそれを表現した文章は向上するといふもので、文章とは道を傳える手段なのである。そもそも科擧とは文章によつて士を取る、取士活動である。文章を通して官僚を取る以上、文章による人物評價という側面を有しており、受験生は自らを磨き高める必要がある。従つて、王禹偁は科擧及第を目指す張扶に對して先ず道を修めることが重要で、それを文章に表わせば、結果として優れた文章となることを述べたのである。ここに有力な古文家が、行卷を送つてきた若き古文家を指導し育てようとする人材養成のプロセスが窺える。従つて、當時の古文復興の展開を考える上で、行卷に對する古文家の返書は見逃せないものとなる。

ところで、當時の科擧試験で重視された文體について、咸平五年（一〇〇二）に張知白が上奏した「上眞宗論時政」に次の如く述べる。
今の進士の科、大いに時の進用する所と爲る。……然る後、策論を先にし、詩賦を後にし、治道の大體を責め、聲病の小疵を捨つ。此の如ければ、則ち夫の進士の流をして、其の習ふ所の書簡にして限有るを知り、其の學ぶ所の文、正にして要有るを知らしむ。

張知白は、科擧の試験において表現上の技巧を重んじるのではなく、道を重視すべきことを力説する。これは、内容を重視する古文によつて受験生を採用しよう主張していることに他ならない。こうした建議が上奏されること自體、當時の科擧の實態が内容よりも表現技

巧を重んじ、一定の制約を滿たした文章、すなわち駢文や詩賦によつて合否を決定していたことを物語っている。従つて、行卷に駢文を用い、その技量をアピールした受験生は多かつたであらう。なぜならば、駢文の巧拙は科擧試験の合否に直結していることになり、駢文の技量を事前に直接的にアピールすることは有効だからである。しかし、かかる情勢のもと、王禹偁に古文の行卷が届けられた理由は、受験生達に先ず當時政治的、社會的に力のあつた古文家・王禹偁に認められ延譽をうけたいという意識があつたことが大きかつたであらう。更に、行卷は事前に自己の能力を賣り込むという性格を持つが、自己の能力、特に士大夫としての政策能力をアピールする作品には、駢文のような表現上の制約がなく、文章に自分の意見や見解を出しやすい古文が適していたという側面もあらう。また事前運動である行卷は、科擧の試験のようにテーマや時間などに制約されず、自らの見解を思い切つて表明しやすいので、自ずと内容に重きを置く古文という文體が適していたことも看過できない。

孫何や丁謂をはじめとして、王禹偁を頼つてきた古文家達は、駢文重視の科擧の合格を目指す士人なのであつた。一見すると、ここには駢文對古文の對立關係が存在するように思われるが、實は行卷に着目するとその二つが對立するものではなくなり、却つて有機的連關を持つことが明らかになる。すなわち古文家達は、古文の文體を用いた行卷によつて、有力者に事前運動を行う。行卷を受けた古文に理解ある有力者は、自らの實際のネットワークを使い他の有力者にその古文家を延譽し、それによつてその古文家の事前の評判を高めておく。科擧は取士活動なるが故、こうした事前の評判は影響を與え、その古文家は駢文を用いて科擧を受験し、延譽による事前の名聲の高まりも相

俟つて合格を果たすのである。

かかるプロセスを踏まえたうえで、今一度王禹偁と彼に行卷を獻呈した古文家達の繋がりについて、特に行卷を受け取つた側である王禹偁がどのような對應・行動をしたかに重點を置いて考察してみる。王禹偁は「送丁謂序」の中で次の如く述べる。²⁸

既に歲滿ち、西掖に入りて誥を掌ること、且に二年ならんとす。是れに由りて、今の進士に擧げらるる者、文を以て相售るに、歲に數百人を下らず。朝請の餘、歴覽して怠るを忘る。然れども其の命題を視て罷むる者有り。數句を讀みて倦く者有り。一篇を終へて止る者有り。或いは詩は采るべきも、其の賦は則ち有る無きなり。或いは賦は稱すべきも、其の文は則ち有る無きなり。能く之れを全くする者は、百に四五ならず。

王禹偁がここで言及している「擧進士」とは、解試合格者で次に省試及第を目指している受験生のことである。とすれば、一年に數百人を下らない擧進士達が、省試受験以前に有力者王禹偁のもとへ進士科及第を目指し自分の作品を獻呈してきたわけで、それらの作品は行卷と考へて間違いない。王禹偁はその中から丁謂や孫何のような古文家を見出したことになる。王禹偁は多くの行卷を朝請後に目を通し、その結果多くの場合は題名、或いは冒頭の數句、または最初の一篇を見て残りの作品を讀む氣がしなくなると言う。たまに良い作品に出會つても、詩は良いけれども賦の力がなく、賦は良いけれども文章力がなない等、なかなか素晴らしい素質を持つた受験生に巡り會わないと述べている。ここに、行卷を受け取つた側の嘆きが端的に表れている。

ところで、ここで注目しておかねばならないのは、なぜかくも多くの受験生が王禹偁のもとに行卷を殺到させたのかということである。

それは、この「送丁謂序」の文脈から明らかなように、當時王禹偁が西掖、すなわち中書省に入り、知制誥を務めていたためである。周知のように、知制誥は制誥起草する任務を司り、文辭に練達していることが要求された。従つて、知制誥の任には名文家が就くことが多く尊崇を集めることになる。この知制誥を、王禹偁は三たび経験している。すなわち、最初は端拱二年（九八九）三月から淳化二年（九九二）九月、次は淳化五年（九九四）五月から至道元年（九九五）五月、最後は至道三年（九九七）六月より咸平元年（九九八）十一月までである。その間、至道元年には、科擧の試験官に起用される可能性の高い翰林學士の任も歴任しており、王禹偁は官界の有力者であった。丁謂や孫何が王禹偁に行卷を獻呈したのは、淳化元年と二年でまさに最初の知制誥の任期中であり、王禹偁が社會に大きな影響を持ち始めた頃である。もちろん、かくの如く、王禹偁が高位の官職に就いていたことが彼ののもとに多くの受験生達が馳せ参じた大きな理由であろう。しかしながら、官職のみによつて、受験生が行卷を送る人物を決定したのならば、他の高位高官の有力者にも同様に行卷が殺到したはずである。にも拘らず、王禹偁のもとに一年に數百人を下らない受験生の行卷が集中した理由は、彼が高官であつたとともに、『宋史』卷二百八十三、王禹偁傳に「後進に詞藝有る者、意を極めて之れを稱揚す」と記載されるように平生から後進を積極的に誘掖し、啓發することを惜しまなかつたからであろう。王禹偁が後進の面倒を見るのに長けていたため、彼のもとには多くの行卷が届けられたのであつた。行卷は、王禹偁が中央の官職を辭した後にも續き、彼の影響力を頼つて、多くの受験生が知遇を求めにやつてきたことを、「答鄭褒書」では次の如く言う。

北宋初期における古文家と行卷

進士林介なる者有り。吾が家に食すること七年なり。私かに吾に謂ひて曰く、今茲、召して貢擧を罷め、而して足下郡に出づ。進士皆滌上に疾走し、文を以て知を求めんと欲すと。吾、介に謂ひて曰く、吾が爲めに諸公に謝し、愼んで滌上に來たるなからしめよ。吾、復びは進士の臧否を議し、以て謗りを買はず。……

王禹偁が至道元年（九九五）に翰林學士を辭め、知滁州として地方へ轉出するに當たつても、多くの士大夫達が彼を頼りにし、なおも延譽を求めようとした。その際、王禹偁は受験生の臧否を議論することによつて、再び人々の謗りを買いたくないと自己の胸臆を率直に吐露した。これは逆に言えば、これまで王禹偁が自己の見解と近い受験生達を行卷によつて見つけだし、積極的にあるいは強引に延譽し、そのため時には反對勢力に妬まれ、反感を買い、政治的對立が生まれていたことを表している。しかし、孫何や丁謂をはじめとして、行卷を利用し自分と見解の近い古文家を見出し、積極的に延譽することによつて官界に進出させ、官界において古文の理解者を増加させていくやり方こそ、まさしく王禹偁が古文を復興させる具體的な實踐の姿なのであつた。

五 古文家柳開と行卷

王禹偁より活躍時代は遡るが、北宋初期の古文家として名高い柳開（九四八〜一〇〇二）について、本章では行卷の獻呈者としての側面に注目し考察したい。彼は古文の創作には優れていたが、駢文や詩賦等の表現技巧を重視する作品の技量は全くなかつたようで、そのため科擧の試験では力を發揮できず、なかなか第出來なかつた。『石林燕語』卷八にそのことを次のように言う。

柳開少くして古文を学び、盛名有り。而れども詞賦を爲るに工みならずして、學を累ねて第せず。

表現技巧を重んじる詞賦に巧みでない柳開にとつて、科擧及第を果たすためには事前運動を行い、有力者に延譽してもらい聲望を高めることが必要であつた。従つて、彼はしばしば有力者に行卷を獻呈している。北宋初期の古文家として『宋史』卷四百三十九、文苑傳に、高錫、范杲、柳開とともに「高、梁、柳、范」と稱されていた古文家・梁周翰に、柳開は行卷を送つている。「答梁拾遺改名書」に言う。

四月十五日、郷貢進士柳開再拜す。……去秋八月已來、遂に仕進の心有りて、以て世に干む。故に今著はず所の文を以て知を門下に投ずるを得れば、實に之れが爲に進士に擧げられん。窃に公に冀ふは、公の言を以て之れを譽め、公の力を以て之れを振はさんことなり。

擧進士である柳開は進士科及第を目的として梁周翰に行卷を獻呈し、更に自分のことを多くの有力者に宣傳してくれるように要望した。ここまでではつきりと、作品を獻呈した有力者に自己の宣傳、すなわち「譽之」(延譽)を求めているのは、柳開の大膽な性格とともに、梁周翰は後に翰林學士にまで昇る程の有力者で、かつ當時の名高い古文家で古文に理解があるため、同じく古文が得意な柳開は期待するところが大きかつたのであろう。古文家が古文に理解のある有力者に行卷という事前運動を行い、出世しようとする過程が窺え、ここに古文家同士の行卷による繋がりが明らかになる。ところが梁周翰は進士科の試験では詩を重視しようとした。『續資治通鑑長編』卷六十七に言う。

給事中梁周翰嘗て將に進士を試せんとするに、先づ詩二十首を試

し、採るべき者を取りて再び試せんことを請ふ。上曰く、此の如ければ、則ち詩に工みなる者は乃ち能く選に中り、文に長ずる者は以て自ら見はるること無しと。

言うまでもなく科擧はあくまで取士活動であり、取士の方法やその重點の置き方にも色々あるので、古文家である梁周翰が、科擧試験において詩を評價しようとしてもそれは不思議なことではない。なぜなら、彼は作詩能力が人物を評價する基準になるとして、詩によつて土を取ることに價値を見出していたからである。よつて、柳開の古文による梁周翰への行卷は効を奏さなかつた。柳開が進士及第を賜るのは開寶六年(九七三)のことである。その二年前、開寶四年春の權知貢擧を勤めたばかりの盧多遜に柳開は行卷を送つている。そのことは柳開の「上盧學士書」に詳しい。

郷貢進士柳開再拜して、書を執事に奉ず。……故夏の初、先容を求めて以て執事の門に登り、直に惡文を以て左右に干む。……凡そ近年進士に擧げらるる者は、唯だ開封解のみ盛と爲す。禮部は升りて中第する者、十に其の五に居す。所以に天下の士は群來して薦を求め、先を争ひて上らんことを冀へり。

解試において開封での合格率が高いことから、開封での受験をすべきかどうかを柳開は盧多遜へ尋ねている。また柳開はそれ以前に盧多遜へ作品を獻呈していることもわかり、こうした一連の柳開の行動から、盧多遜への作品獻呈が科擧合格を目指したものであつたことがわかる。そして、開寶六年當時翰林學士になつていた盧多遜の推薦により、柳開は進士及第を賜ることになる。その事情について『石林燕語』卷八に次の如く言う。

開寶六年、李文正昉學を知し、黜せられて下第す。徐士廉擊鼓し

て自列す。盧多遜に詔して、講武殿に即きて覆試せしめ、是に於いて再び宋準よりして下二十六人を取る。是れより遂に故事と爲る。再試は此より始まる。然るに時に開は復た預らず。多遜爲に言ふ、開は英雄の士にして、篆刻に工ならず、故に考校及ぼすと。太祖即ち召對して大いに悦び、遂に特に及第を賜ふ。

柳開は行卷で盧多遜に目をかけられていたおかげで、ここに至つてようやく官界へと歩を進めることができたのであつた。ここで注目すべきは、柳開が評價されたのは「英雄の士」としてであつたという點である。柳開が詩賦駢文の技量に劣つていたにも拘らず進士及第を賜つたのは、事前の運動によりその人物が評價されていたからである。科擧が文學的能力のみを見る手段であつたならば詩賦駢文に劣る柳開は到底採用されることはなかつたであらう。

ところで、この開寶六年の省試では、權知貢擧の李昉が同郷の武濟川なる人物を學力が劣るにも拘らず及第させたことが原因で、太祖が再試を試みた。それが前掲の記事で、この再試は殿試の成立過程で看過できない事件でもあつた。柳開は、實はこの時の權知貢擧・李昉に、次に擧げる「上主司李學士書」を送り、自らをアピールしていた。この書簡は、省試終了後、三月の合格發表前の期間に送られており自己の獻呈していた行卷を讀み過ごさないようにと確認をした書簡であり、所謂溫卷に當たる。この時期は李昉らの答案採點期間中で、従つて柳開は合格者決定に直接影響を及ぼすことを目論んでおり、なりふり構わぬ必死の事前運動であつた。更に注目すべきは、この書簡から柳開が行卷として獻呈していた作品がはつきりと分かることである。

二月日、郷貢進士柳開再拜して、書を執事に獻ず。……去年の秋

北宋初期における古文家と行卷

より、擧に應じて京師の間に在りて、士大夫或いは惡文を以て譽せらるる者多し。度るに、明公の亦た甚だ知る所なり。是を以て小子、事を行ふの間、復た此の書に列せざるは、開の納むる所の文中に、東郊野夫及び補亡先生二傳の以て觀て之れを審かにすべきこと有るを以てなり。

「東郊野夫傳」、「補亡先生傳」は、今日いづれも柳開の古文の代表的主張が表れ、彼得意の古文を用いた作品として知られている。これらがどちらも柳開の權知貢擧・李昉への行卷であることは、當時の古文の復興を考察する上で、やはり行卷という風習が無視できないことを表していると思われる。そして「東郊野夫傳」では「野夫深く其の韓文の要妙を得、筆を下すに將に其の文を爲るを學ばんとす」として、韓愈や柳宗元の古道を受け繼ぐことを自認し、「補亡先生傳」では、自らを補亡先生と名付けた理由、「庶幾ふに、吾は孔子に達せんと欲する者なり」という自己の進むべき方向性、更にはこれまでの諸家の經書に關する注釋が義理に到達していないと見做して、自らの經書に對する見解を種々の作品中に披瀝したことを述べ、最後に「後世に仕ふるに従ひて、其の道を行ふ」と締めくくる。行卷として獻呈したこれらの作品の中で表明した自身の見解や理念を、官僚となつた後に實踐すると宣言しているのである。すなわち、事前運動である行卷が官僚となつた後の所信を表明する役割を擔つていたのである。省試の試験場では、一定の形式に従うなど様々な制約があり、受験生は答案をともしればその場しのぎに作成するという感が否めない。しかも、柳開のように表現技巧が得意な受験生は制約が多ければなおさらその突破は難しい。ところが一方、行卷では題材や主題を自由に選び、構想を時間をかけて練ることができ、自らの理念、才能、風格を

存分に表現することが可能である。従つて、柳開は自らの得意とする古文を用い、自己の主張を整理し、「東郊野夫傳」、「補亡先生傳」等にまとめ、行卷として李昉に送つていたのであつた。當時行卷の成否が科擧の及第に結びつく可能性がある以上、柳開のように科擧の試験で試される詩賦や駢文が苦手な受験生は、行卷として獻呈する作品の作成に精力を注いだのは間違いない。今日柳開の古文の代表作と言われているものが實は行卷として獻呈した作品であつたことは注目される現象であり、これは、北宋の古文復興を考察する際に、古文家の行卷が極めて重要な存在であることを物語つてゐる。

六 おわりに

これまで北宋の古文復興の分析において、科擧、就中行卷との關連は全く注目されていなかった。しかし、結果として古文が廣まり復興する過程においては、歐陽脩が主宰した嘉祐二年の科擧をはじめとして、明らかに科擧を介した働きが存在していた。しかも、既に見てきたように、科擧及第を目指すべく行卷として獻呈した作品や行卷への返書の中で、その古文家の古文に對する代表的見解がしばしば表出されていた。これらは、行卷が北宋初期の古文の復興と密接に關連していることを示している。

言うまでもなく科擧とは取士活動、文章による人物評價である。かかる情勢のもと、科擧の事前運動である行卷に古文を用いたのは、自分の能力、才能、風格を誇示し、官僚となつた後の抱負を明らかにするために表現上の制約のない古文の文體が適していたからであり、また王禹偁のように古文に理解のある有力者がいて、古文家を積極的に延譽し官界に押し上げていたからでもある。これを孫何・丁謂や柳開

のような受験生の側から言えば、後進の面倒見の良い古文家に古文の行卷を送り延譽して貰い、一方、科擧の試験には表現技巧を重んずる駢文や詩賦で臨み、競争率が高く難關であるものの、事前の延譽のおかげもあつて及第を果たすことになる。柳開の場合は科擧試験に合格できなかったけれども、行卷により人物が評價されていたので及第を賜ふこととなつた。こうして古文に理解のある士人達が官界へと進出することにより、官界での古文復興の潮流は次第に大きくなつていくのである。ここに、行卷を介して古文が廣まり、結果として古文の復興する動きが間違ひなくあつたと言えるであらう。

既に見てきたように、古文運動という語句、概念は、宋代當時には存在せず、それは胡適によつて始めて提唱された現代語であつた。にも拘らず、あたかも宋代當時に文壇があつてそこで文學運動としての古文運動が行われていたような錯覺を抱いてしまひ、従つてその實態や運動としての展開過程の分析が疎かとなり曖昧なままであつた。本稿で行卷に着目したことで、北宋初期における古文復興の具體的な展開の一端が明らかになつた。もちろん、これは當時の古文復興過程の僅かに一側面を描出したものに過ぎないけれども、古文の復興が政治と全く關係のない文體改革の運動としてのみで捉えきれないことを提示できたと思う。更に、當時の古文家が古文作成で生計を立てるといふ職業作家などではなく、官を以て業としていたことを考え合わせる、それは科擧という取士活動、行卷という就職運動や政治的出世を目指す動きと連動する側面を持つことは否定できない。文學運動としてのみで捉えることができない證據として、たとえば、王禹偁から韓愈や柳宗元の古文に匹敵すると絶賛された丁謂は、科擧及第後、王禹偁とは決別し、今日では古文とは反對の極に位置する『西昆酬唱集』

に作品を残しているということが擧げられる。つまり、丁謂の古文による行巻獻呈は、王禹偁に延譽され、それによつて虎榜に名を連ね官界に進出することのみを目的としていたことになる。これは、行巻を介した古文復興の試みの限界を示しているけれども、古文の復興を獨立した文體改革の問題として把握しようとする、こうした實情は完全に脱落してしまい、その實態を見失うことになるのである。

注

- (1) 胡適『白話文學史』上卷に「韓愈提倡古文、反對六朝以來的駢偶浮華的文體。這一個古文運動、下編另有專章、我在此且不討論」とある。
- (2) 羅聯添氏は「論唐代古文運動」(臺灣學生書局『唐代文學論集』)所收一九八八年)のなかで、胡適が『白話文學史』で古文運動という語句を始めて使用したことを指摘した後に、「到民國二十年(一九三一年)胡雲翼『中國文學史』第十一章標題是「唐代的文學運動」、稱「古文運動有韓柳二氏而努力而達於最高的發展。到民國二十一年(一九三二年)鄭振鐸『中國文學史』第二十八章以「古文運動」爲題……此後「古文運動」成爲一個普遍使用的名稱」と論じる。
- (3) 知嘉祐二年貢舉。時士子、尙爲險怪奇澁之文、號太學體。脩痛排抑之、凡如是者輒黜。
- (4) 歐陽脩が太學體を排斥した経緯については、拙稿「太學體考」その北宋古文運動に於ける「考察」(日本中國學會報第四十集、一九八八年)を参照されたい。
- (5) 是時、天下學者、楊劉之作、號爲時文。能者取科第、擅名聲以誇榮當世。未嘗有道韓文者。予亦方舉進士、以禮部詩賦爲事。
- (6) 宋代の重要な科擧改革、及びそれが行われた時期については、荒木敏一『宋代科擧制度研究』(東洋史研究會、一九六九年)のまえがき部分に簡潔にまとめられている。なお、科擧制度については、荒木氏の

北宋初期における古文家と行巻

著書以外に梅原郁『宋代官僚制度研究』(同朋社、一九八五年)、村上哲見『科擧の話』(講談社、一九八〇年)等を参考にした。

- (7) 上海古籍出版社、一九八〇年、三頁の記述。原文は以下の通り。「所謂行巻、就是應試的舉子將自己的文學創作加以編輯、寫成卷軸、在考試以前送呈當時在社會上、政治上和文壇上有地位的人、請求他們向主司即主持考試的禮部侍郎推薦、從而增加自己及第的希望的一種手段」。なお、該書の唐代古文運動と行巻の分析箇所は本稿をなす上で大いに参考となった。

- (8) 當時の科擧の事前運動としては、行巻以外に公的に認められていた「公卷」という事前運動があつた。しかしこれは、試験官が大量に受験生の作品を読むことになり、事實上事前運動としては機能しなくなつていた。なお公卷は、慶曆元年(一〇四一)に廢止された。

- (9) 筆者が初めて北宋の古文復興と行巻の關係に着目したのは、拙稿「西昆派文人丁謂について―王禹偁の古文運動と關連して―」(鹿児島大學文科報告二十七―一、一九九一年)においてである。その後拙稿「行巻より見た北宋古文運動について―王禹偁を手がかりとして―」(中國文學論集第二十二號、一九九三年)で王禹偁に着目して考察をした。本稿は、それらを更に發展させ北宋初期の古文家と行巻の繋がりを今一度整理し明らかにしようとしたものである。従つて、行巻の關係上、前稿と重複する部分があることを了承していただきたい。なお、これらを除いて、北宋の古文復興を行巻に着目して考察した論者は管見の及ぶ限り見當たらぬ。

- (10) 糊名法、臚錄法の導入については前掲荒木敏一『宋代科擧制度研究』第二章第七節参照。

- (11) 上謂王旦等曰、今茲舉人、頗以糊名考較爲懼。然有材藝者、皆喜於盡公。

- (12) 國初、襲唐末士風。舉子見先達、先通牋刺。謂之請見。既與之見、他

日再投啓事。謂之謝見。又數日、再投啓事。謂之溫卷。或先達以書謝、或有稱譽、即別裁啓事、委曲致謝、更求一見。當時舉子之於先達者、其禮如此之恭。近歲、舉子不復行此禮。而亦鮮有上官延譽後進者。

(13) 前掲荒木敏一『宋代科舉制度研究』二二四、二二五頁參照。

(14) 少與孫何友善、同袖文謁王禹偁。禹偁大驚重之、以爲自唐韓愈、柳宗元後、二百年始有此作。世謂之孫・丁。

(15) 以下、王禹偁の作品は、『王黃州小畜集』、『王黃州小畜外集』(いずれも四部叢刊所收)に基づき、適宜他本を参照した。原文は以下の通り。「今春生東來。益以新文二編、爲書以投我。其間有律詩、今體賦文。非向所號進士者能及也。其詩倣杜子美、深入其間。其文數章、皆意不常而語不俗、若雜于韓柳集中、使能文之士讀之、不之辨也。」

(16) 今年冬、生再到闕下、始過吾門。博我新文、且先將以書。猶若尋常貢舉人、恂恂然執先後禮。何其待我之薄也。

(17) 凡數十篇、皆師載六經、排斥百氏。落落然眞韓・柳徒也。

(18) 天下舉人、日以文溲吾門。其中、傑出群萃者、得富春孫何、濟陽丁謂而已。吾嘗以其文誇大于宰執公卿間。

(19) 王元之素不喜釋氏。始爲知制誥、名振一時。丁晉公、孫何皆游門下。元之亦極力延譽。由是衆多側目。

(20) 又學古文字于柳開、與張景齊名。至道中、以文謁王禹偁。禹偁奇之。舉進士、累官侍御史。

(21) 前掲程千帆氏の著書の第七章では唐代の古文家が行卷をする場合、自己の得意の作である古文を意識的に用いたことを次のように言う。「也足以證明當時古文作家是以他們所擅長并且有意識地在加以提倡的這種文體來行卷的。」高辯も、唐代の古文家と同じく自己の得意の作である古文を意識的に行卷に用いたことは十分に考えられよう。

(22) 下車以來、有進士皆接焉。……退而閱其文句、辭甚簡、理甚正。雖數千百言、無一字冗長、眞得古人述作之旨耳。……是生之道與孫・丁

同。而命未遇矣。……生之書首引孫・丁之事。故吾述其始末、文不覺繁。

(23) 子又携文致書、問道于我。……夫文、傳道而明心也。古聖人不得已而爲之也。且人能一乎心、至乎道、修身則無咎、事君則有立。及其無位也、懼乎心之所有不得明乎外、道之所蓄不得傳乎後、于是乎有言焉。又懼乎言之易泯也、于是乎有文焉。信哉、不得已而爲之也。既不得已而爲之、又欲乎句之難道邪。又欲乎義之難曉邪。必不然矣。……姑能遠師六經、近師吏部、使句之易道、義之易曉。

(24) 前掲程千帆氏の著書の第七章に「中唐古文家留下了不少發表自己文學見解的書信。這些文學史和文學批評史上極可珍視的材料、在當時却往往是爲了回答向他們行卷的舉子而寫的」という指摘がある。

(25) 原文は『續資治通鑑長編』卷五十二に収録されている。また、『全宋文』(巴蜀出版社、一九八九年)卷百八十九には「上眞宗論時政」として収録されており、本稿はその表題に従った。原文は以下の通り。「今進士之科、大爲時所進用。……然後、先策論、後詩賦、責治道之大體、捨聲病之小疵。如此、則使夫進士之流、知其所習之書、簡而有限、知其所學之文、正而有要。」

(26) 既歲滿、入西掖掌誥、且二年矣。由是今之舉進士者、以文相售、歲不下數百人。朝請之餘、歷覽忘怠。然有視其命題而罷者。有讀數句而倦者。有終一篇而止者。或詩可采、其賦則無有也。或賦可稱、其文則無有也。能全之者、百不四五。

(27) 有進士林介者。食于吾家七年矣。私謂吾曰、今茲召罷貢舉、而足下出郡。進士皆欲疾走滁上、以文求知。吾謂介曰、爲吾謝諸公、慎勿來滁上。吾不復議進士之臧否、以買謗矣。……

(28) 柳開少學古文、有盛名。而不工爲詞賦、累舉不第。

(29) 以下、柳開の作品は『河東先生集』(四部叢刊所收)に基づき、適宜他本を参照にした。原文は以下の通り。「四月十五日、鄉貢進士柳開再拜。……去秋八月已來、遂有仕進之心、以干于世。故得今以所著文投

知于門下、實爲之舉進士矣。窃冀于公者、公以言譽之、公以力振之。」
なお、高津孝「宋初行卷考」(鹿兒島大學法文學部紀要、人文學科論集第三十六號、一九九二年)では、柳開の行つた様々な行卷についての考察があるので、あわせて参照されたい。

(30) 給事中梁周翰請將試進士、先試詩二十首、取可採者再試。上曰、如此、則工詩者乃能中選、長於文者無以自見矣。

(31) 鄉貢進士柳開再拜、奉書于執事。……故夏初、求先容以登于執事之門、直以惡文干于左右。……凡近年舉進士者、唯開封解爲盛。禮部升而中第者、十居其五。所以天下之士群來而求薦焉、爭先而冀上焉。

(32) 開寶六年、李文正昉知舉、被黜下第。徐士廉擊鼓自列。詔盧多遜即講武殿覆試、於是再取宋準而下二十六人。自是遂爲故事。再試自此始。然時開復不預。多遜爲言、開英雄之士、不工篆刻、故考校不及。太祖卽召對、大悅、遂特賜及第。

(33) この年の合格発表が三月に行われたことは『續資治通鑑長編』卷十四、三月の條に「辛酉、新及第進士雍邱宋準等十人、諸科二十八人詣講武殿謝」という記事があることからわかる。また、柳開の書簡が主司すなわち試験官である李昉宛となつてゐること、更に柳開の書簡の日付が二月となつてゐることを考え合わせると、柳開は省試の終了後、三月の合格発表前に権知貢舉・李昉に書簡を送つて事前運動をしてゐたことになる。また、前掲高津論文では「試験が終つてから合格発表のあるまでの間に、知貢舉(試験委員長)に對して行卷を獻ずることはルール違反ではなかつた。」という指摘がある。

(34) 二月日、鄉貢進士柳開再拜、獻書于執事。……自去年秋、應舉在京師間、士大夫或以惡文見譽者多矣。度明公之所亦甚知也。是以小子行事之間、不復列于此書者、以開所納文中、有東郊野夫及補亡先生二傳可以觀而審之。

(35) 王禹偁と丁謂が決裂した経緯は次の通りである。至道元年(九九五)

に王禹偁は、開寶皇后の葬儀に對して意義を唱えたため、太宗の不興をかい知滁州軍州事へと左遷させられた。このことについて、丁謂は王禹偁の態度を「高亢剛直」と言い切り、更にはその政治姿勢も名節を求めるところに齷齪していると痛烈に批判した。自己の官界進出過程で多大な恩恵を與えてくれた王禹偁を、官僚となつた僅か數年後に激しく批判し、簡単に裏切るということは、丁謂が實は當時の政治上の勢力關係の中で、自身の立場を變化させていたことを物語つてゐる。丁謂にとつて、古文は自己の信奉する文體などではなく、自分の利益・出世の手段として用いられてゐたことを意味してゐる。詳しくは拙稿「西昆派文人丁謂について―王禹偁の古文運動と關連して―」(鹿兒島大學文科報告二十七―一、一九九一年)を参照されたい。